巌念寺だより

春彼岸号／令和２(2020) 年

題字　大塚婉孃　書　　菅原 篤　画

春彼岸のお知らせ

●春のお彼岸は三月十七日（火）から二十三日（月）までの一週間です。今年も「花まつり（四月八日）」に先がけて、お釈迦様の誕生仏を安置しております。どうぞ誕生仏に「甘茶」をかけてお参りください。

　また、二十日（金）・春分の日はお中日（ちゅうにち）といって、お彼岸の中心になる日です。当日は午前十一時から本堂にて彼岸法要をお勤めいたしますので、どうぞ皆様でお参り下さい。また、その際にご希望の方はお位牌・過去帖などをご持参ください。ご一緒にお参りいたしましょう。

●三月二十日（金）（春分の日）の午前十時～午後四時まで、昨年来の好評につき、お寺の二階客間にて「オバラさんの老いじたくカフェ」という、小原伯夫さん（行政書士）による、老い仕度のためのよろずサポート相談室を開きます。

　また、グリーフ・ケア・グループ「ＯＲＩＺＵＲＵ」の皆さんが折り紙のワークショップやアロマ・マッサージもしてくださいます。どうぞお気軽にご参加ください。

●三月二十一日（土）の午前九時半頃から、ひばりが丘の墓地での墓前読経をうけたまわります。ご希望の方はお早めにご連絡下さい。

電話０３（３８４４）９３８３

月例法話会「新念会」

毎月八日（八月、十一月を除く）の午前十一時より「新念会（しんねんかい）」という「お経と法話（仏教のお話）の集い」を行っています。「仏教の見方」について聞いていただければと思っております。また、法話の後は、皆さんでにぎやかに楽しくお昼食をいただきます。お檀家以外の方でも歓迎いたします。お友達をお誘いいただき、一度いらしてみませんか。

「ケネス・タナカの仏教教室Ⅳ」始まる

年末の「巌念寺だより」でも既にご案内いたしましたように、仏教教室は好評につき、引き続き第四期目を実施することになりました。ケネス・タナカ先生（武蔵野大学名誉教授）を講師にお迎えし、内容も新たに仏教入門講座（現代の心理学を通して学ぶ仏教）が四月末より始まります。

　また、お話しの後には「ミニ懇親会」もあり、先生を囲んで軽食を楽しみながら、気軽でリラックスした学びが続きます。内容に興味のある方は「巌念寺公式サイト（https://www.gonnenji.com）」で詳しく紹介しておりますのでご覧ください。

●お寺の駐車場の一部は、二月より「コインパーキング」になりました。（必要に応じて三〇分までの「利用券」を差し上げますのでお申し出ください）

ご奉仕・ご奉納御礼

昨年末から今年の新年会までに次の方々よりお手伝い・ご奉納をいただきました。心より御礼申し上げます。（順不同）

田村恵子様　深山　明様　仏木祥英様
臼田力夫様　熊谷芳雄様　保谷欣志様
櫻井忠雄様　近藤哲生様　常田幸子様
武井健祐様　川上よし子様
〈修　正　会（新年会）〉
松下道典様　佐藤富美子様
矢野明美様　野中利枝様　　その他

ご懇志御礼

昨年末から今年の新年会までに次の方々より特別にご懇志を賜りました。心より御礼申し上げます。（順不同）

佐藤 誠様　久保島喜久子様　須田百合子様　松田英之助様
その他

「ケネス・タナカの仏教教室Ⅲ」出版

昨年に巌念寺で実施されたケネス先生の仏教教室の内容が本になりました。仏教に関心のある方は一読されることをお勧めいたします。

　サブテーマに「ユーモアを通して学ぶ仏教」とありますように、身近で初心者でも分かりやすい内容です。ご希望の方は巌念寺までお申し出ください。（無料）

巌念寺　〒111-0042 東京都 台東区 寿 1-11-2
http://www.gonnenji.com
電話：03-3844-9383　FAX：03-3844-9393
E-mail：gonnenji1253@gmail.com

「六道輪廻」が語りかける意味

昨年、ご縁のあるキリスト教の先生に依頼されて、ルター派の教会の記念講演会で「仏教の死生観」というテーマでお話させていただきました。今回はその内容の一部を短くまとめてご紹介してみたいと思います。

六道輪廻

仏教の死生観の代表的なものに「六道輪廻」あるいは「生死輪廻」という考え方があります。ある辞書によりますと、

「生死」とは生命を有するものが「生」と「死」を繰り返すこと。生まれ変わり死に変わりしてとどまることがないこと。

「生死」は迷いの世界、苦の世界（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天という苦的生存状態）を示す典型的な語として用いられている。元語「サンサーラ」は回ることを原意として「輪廻」または「生死」と意訳されている。

このように「生死」は迷いの世界、苦の世界であると説明されています。苦の世界というのは、この図にありますようるので、いかにしてこの「生死輪廻」の連鎖から抜け出していくかということが仏教徒の方向性（目標）なのです。そのために現世で善行を積んだり、出家して修行し学んだりすることになります。

「天」はよいところ？

私がこの「六道輪廻」という見方を聞いた時に面白いなと思ったことがあります。イメージとして地獄は分かりやすいですよね。しかし、天人として生まれることがなぜダメなのか？　文字通り楽しい世界であり、苦痛を忘れていられる世界です。死後に楽で快適な所に行けるのであれば、それで結構ではないかと思うかも知れません。ただし、天の生活にも期限がある。寿命があるのですね。その寿命が終わってしまう時の苦しみは地獄よりも苦しいと書いてあります。

これは私たちの日常生活と重ね合わせて想像しても分かると思うのです。調子の良い快適な生活をしていたとしても、それができなくなってしまう時の苦しみは、普通の生活を送っていた人より大変な苦しみを感じます。あれもできなくなる、これもできなくなる。できなくなること、失うことばかりが際立って来ますから、天の世界から去ることの苦しみは地獄の何倍も苦しいと説かれています。

また、思い通りになっている快適な生活は楽しいかも知れないけれども、慣れてくると麻痺して、本当に心から嬉しいということ—思いのではなくて「まぁ、こんなもんか」というように感動は味わいにくく、幸福感への反応は鈍くなります。また、快適で自分の思い通りになっていると、本当に大切なことを見つめたり求めようとする動機も希薄になりますので、そんなことでは精神的に豊かな生き方にならないということが仏教の教えるところなのでしょう。仏教的な意味では、天に生まれるということ—思い通りになる快適な生活は、本当に自分の生き方に満足していくようなことにならないよというわけです。だから「天」も迷いの世界の一部であるとしています。仏教でいう「天」の世界の意味は、私たちの常識やキリスト教でいう天の世界とは違います。「天」という漢字が同じなので、混同すると誤解を招きます。

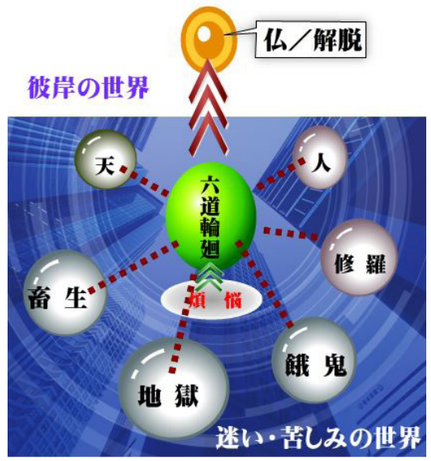
「人」として生まれて

そして、六道の中では人間に生まれることが一番良いんだよというのが、この六道輪廻の話の結論なのではないかと思われます。なぜかというと、人間に生まれるということは言葉が分かる存在です。仏教に触れる機会と能力を与えられる唯一の世界である。だから人間として生まれているり方を生まれ変わり、死に変わりしながらグルグルと連鎖して回っているのが仏教の死生観の代表的なものです。

こうした「輪廻」という考え方は、仏教が生まれる以前から、インド人の考え方としてあったようです。生き物は死んだ後、前世に生きていた時の行為によって次の生まれ方が変わる。だから次の生まれ（未来世）が人間であるとは限らないのですね。動物になったり、地獄の住人になったりするかも知れないという見方です。

そこで一つ押さえておかなくてはいけないことは、生まれ変わり死に変わりする連鎖自体を、仏教では「苦しみ」と見ます。例えば「天」に生まれるのであれば良い状態だから苦しみではないと思うかも知れません。しかし、もともとの「苦」という意味は、インドの言葉では「ドゥッカ」といい、「思い通りにならないこと」という意味だそうです。物事が自分の期待とか欲求に沿う通りに必ずしもなるわけではないから「苦しみ」だというように中国では意味が展開しているのでしょう。

三世観



それと関連して「三世観」というのが仏教の特徴です。前世があって、今—現世があって、更に来世（未来世）があるという見方があります。私の前世は何であったかは分からないけれども、前世の行い（業）によって、たまたま人間として生まれてきている。今—現世では人間として生きているわけですが、そこでの生き方が悪ければ、来世には地獄・餓鬼・畜生とかいわれている、より苦しみの強い世界に生まれ変わってしまうよという考え方です。

三世観—前世があるという点は、キリスト教などと違うところではないでしょうか。仏教では、生まれ変わり死に変わりすることは、実はかけがえがないことなのですよと説くわけです。それまでの前世では「人間」以外の五種類のあり方をとって、ずっと輪廻をうろうろと繰り返して来たのかも知れない。けれども、ようやく人間としてこの世に生まれて来た。そのお蔭で仏教の智慧と慈悲に触れられる。六道輪廻の苦しみから抜け出せるベストチャンスは人間なのだという言い方をするのです。

人間として人生にはいろいろあるかも知れないけれども、苦しいこと、楽しいこと、思い通りにならないこともたくさんあるだろうけれども、その中で仏教の智慧と慈悲に触れることがあれば、その人らしい充実した、これで良かったなと言える生き方を全うできる。それが仏教でいう「救い」「悟り」「解脱」ということになっていくわけです。

「彼岸」（彼方の岸）という言葉によって、仏教が私たちに語りかけていることは、「六道輪廻」という比喩的な表現で説かれている苦しみや迷いの世界（あり方）から離れた「岸（世界）」に向かっていくことを促しているのだと思います。